

第1章 修復前調査

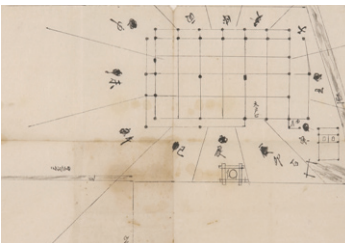
1-1 古図文獻調査

1 [場所と周囲の状況]

山梨県南アルプス市桃園(中巨摩郡檜形町)は南アルプス山塊の檜形山を頂きに、御勅使川扇状地、原七郷と言われてきた水との闘いの歴史を持つ地域で、東に甲府盆地を見る釜無川左岸の街道駿信往還(国道52号線)小笠原の宿を中心にした町である。明治維新の後、明徳村(小笠原、桃園、山寺)として、甲州西部筋近代化の中心的役割をした地域である。ここ桃園地区は、古くは京都六条桃園に御所をおく、桃園の宮貞純親王の食封の地であったことより、通称「院の宮」と称する桃園神社(慶長八年黒印神領三斗六升・社地三千六百坪を与えらるる)を中心に街道添い地割りのはっきりとした集落を形成している。また国道52号線及び旧廃軌道拡幅のために新しい整然とし町並みに変化しつつある。

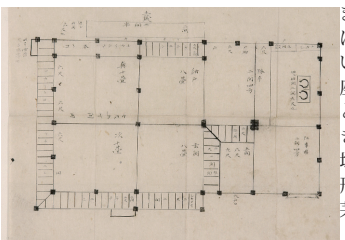
2 [成立と経緯]

村松家住宅は駿信往還に添った桃園新田集落の中心にある。敷地東をこれ(国道52号線)に面し、西隣はかつて桃園の宮に接していた。現在は廃軌道(旧峡西電鉄)と接している。幕末以前は長百姓、名主(〜伊助、助右衛門)として村に貢献した文献が記されている。明治維新时期、桃園村村医三代目、勝格弥医師(医業と私塾をもって子弟教育に貢献)の次男健齋(文政九年1826年〜明治17年1885年)が村松家に養子入り、医業と商家及び村惣代長百姓として活躍をする時期より建築の動きが活発化する。健齋は維新の推進派に多大なる軍資金を供給する傍ら、両替商として名称〜貸付商会銀行(明治11年6月)を本社賑沢に起こし、横浜正金銀行にも出資した。地域と国の近代化が進み行くことに希望を抱き、村松家の基礎を築いた。その子次男村松正次郎(文久二年1862年生まれ)は、上京して山岡鉄舟の教えを請い、明治15年(1883年)〜明治17年(1885年)の間、谷干城(たに たてき〜西南の役熊本鎮台司令長官、陸軍中将、第一次伊藤内閣農商務大臣1885年〜1888年)の書生として漢学を修業の後、明治20年3月明治法律学校(現明治大学)に入る。後、通信省管理局に努め、後政財界で出世する。また生業の塩、油の販売、造り酒屋、たばこの販売、両替商、銀行等とはもとより、紡績会社事業等への出資を拡大して行くのであった。長男は勝家の養子となり勝格也医師五代目として医業を継ぐ傍ら、立憲政体をたてるために政治的に尽力し、明徳村戸長の職に就き、早川開墾の促進を強調するなど郷土のために尽くした。また、その著書『臨床応用硯北日誌』に地域保健医療の貢献が記されている。正次郎の長男である先代重雄はほとんど郷里を離れ、東京にて村松家の拡大に尽力され、神田神保町に居を構え加藤シヅエ前夫・石本男爵と『大同洋行〜洋書問屋』を起こす。その後、レストラン『Madchen メッヒェン(少女)』を開業する。共栄医療組合病院(峡西病院と称す)現在の巨摩共立病院は、当家を利用して発足し、地域の医療保健施設として一時期利用された(昭和7年1932.5.12)。この商家蔵の中でレントゲンを撮った人の記録も残っている。戦中戦後の時期疎開先として桃園と東京とを往復し、幾多の経済危機を乗り越えて昭和49年に他界した。嘉永二年六月(1849年)以前の図面



慶応元年(1865年)以前の図面

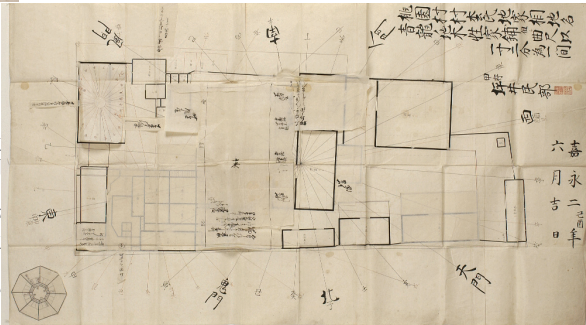
このような経緯の中、主屋は、嘉永二年六月(1849年)以前より存在していたことが地家相図(坪井民部)より判る。その地家相図より古いと思われる家相図では現存している主屋の平面と酷似している小さな間取り(7.5間×5.0間)をしている資料があり、村松家の住まいだけの原形を呈している



また、もう一つの主屋平面図資料は先のもより新しく、現存している間取り(8.5間×5.0間)の座敷、大黒、小黒柱、玄間位置など移転増築前のものとして断定できる平面である。この頃のこの地域の民家のプロトタイプとして檜形町誌の例でも判るとおり平家の茅葺き切り妻造りと推測される。

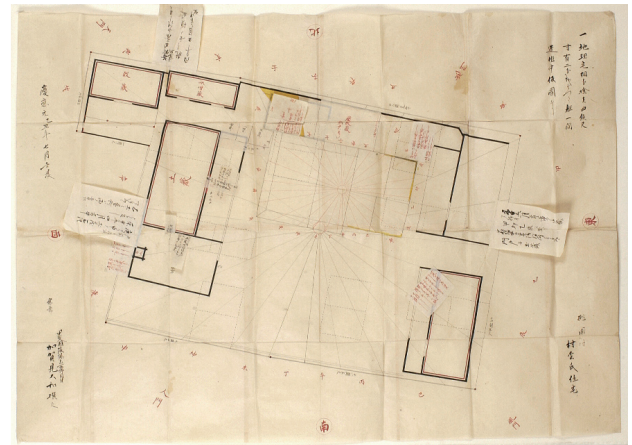
地家相図-1 嘉永二年六月(1849年)以前地家相図(坪井民部作)の地家相図より古いと思われる地家相図。

敷地東部は駿信街道沿い間口14間あり4間半×2間の北蔵、間口2間の長屋門、6間×3.5間の南蔵がある。主屋との間には井戸らしき囲いがある、南には厩らしき建物がある。主屋の南西には1.5間の庭中潜り門がある。敷地西半分は蔵群が配置されている。



出来た大空間はこのうえなく美しい。当時係った技術者、職人の知恵が近代化を支える背景として目を見張るものがある。またこの村松家住宅の特筆すべき特徴でもある奥座敷、中座敷の壁仕様は、金糸、銀糸折込みの布壁仕上と、ラピスラズリ(瑠璃色の貴石)を擦り潰し、塗り込めた青い壁や、葉模様を浮かした左官塗り壁類は貴重な素材を使った文化の高さが感ぜられる。また、間仕切り絵襖もこの家のために描かれたものであり、欄間、板戸、障子など伝統技術に裏打ちされたものとして残されている。それから玄関引き戸のカットガラスは神田

嘉永二年(1849年)の地家相図によると、この時点で蔵の数が5〜7棟有り、かなりの生産石高や造り酒屋等の多義に渡る商売をしていたことがうかがわれる。また、慶応元年(1865年)の地家相図は敷地の東半分をどう改築するかのものであろう。



地家相図-2 慶応元年(1865年)七月吉日甲斐國陰陽宗取締目付加賀大和撰之の地家相。

嘉永の家相図と見比べてみると主屋の直西の蔵群にはあまり変化ない、またその西の蔵群はこの図から切り離されている。敷地東部の駿信街道沿い間口14間位あり4間半×2間の北蔵はより密接に主屋と一体化できるように増改築され、主屋を移動改築するための図であろう。この時点で健齋さん(39才)はすでに勝家より村松に婿入りし、医業に専念してくる。息子次男正次郎4才である。これ以降村松家住宅は激動の維新をくぐり抜け、近代史の波に乗って現在の状況に近く成長変化していくのである。現存資料での判断から、主屋はこの後裏に1.5間増築し(8.5間×6.5間)越屋根付き二階建てとして、モダンな装飾窓をリズムカルに施し敷地東真ん中に曳き家される。二階は(8.0間×4.0間)の大空間として使用可能のように東立て無く、ダイナミックな構造梁(天秤梁+トラス組)で架構されている。産業としての養蚕はもとより、人の出入り多い村医として、診療の場や、私塾として子弟教育、青年実学の場として使用していたようである。蔵の位置は大幅に移動されて、街道沿いの両替商も営む土蔵二階建商家蔵へ、主屋裏の文庫蔵へと体裁を整えて行くのである。

3 [構造]

主屋 10間×6.5間、木造二階建て、漆喰壁仕上、瓦葺き
商家蔵 8.0間×3.75間、土蔵二階建て、漆喰壁、腰壁ナマコ壁仕上、瓦葺き
文庫蔵 3.5間×2.0間土蔵二階建て、漆喰壁、置き屋根瓦葺き
厩(雪隠6.0尺×10.0尺、木造平家建、下見張り壁、瓦葺き。

4 [様式の概要]

[主屋] は歴史的経緯の中で数回増改築、曳家をしている。現存している間取りは、この地域特有『サの字型』プランの六間通しを原形として造り始めたのが、嘉永二年(1849年)以前である。それ以後と見られるもう一つの平面図が残っているものは、それより成長して、八間通しの奥座敷、中座敷それぞれ10帖間としている。樫の大黒柱、小黒柱のスパンは1.5間の6帖の大戸土間、大黒柱東にクド(カマド)があり現存していた二階の煙り抜き跡と一致する。その後明治初期、北裏から現位置に曳家し1.5間繰足して、12間通しとした大改造をした。その時点で商蔵とは平家であつた跡が残っている。このつなぎの土間空間を入ると15間通し(間口5スパン桁行3スパン)の大平面を形成した。同時に一挙二階建てとして、両切り妻に装飾窓を二ヶ所つづけ、南側二階には漆喰のR枠開き窓がリズムカルに八ヶ所設けられ、モダンな様相を醸し出してきたのである。

それから、主屋と店蔵との繋ぎの土間より、階段梯子を設けて土間より二階に上がるために、その下屋に3尺束を継ぎ足し、桁高を上げて立体的に使用可能な空間とした。これは養蚕業とそれ以外の何かの商売か、私塾か、に使われた。二階の架構造は軒高を揚げるため、大黒柱、恵比寿柱(小黒柱)の頭に母屋梁受けの水平梁を流し、束を省いた船底状の構造として

神保町で経営していた頃の『Madchen メッチェン少女』の玄関引き戸を移設して使用している。これは後に人間国宝になったガラス職人が昭和9年頃仕上げたガラスと言われている。

[商家蔵]は1階を8間×3.25間とし、土間、南店蔵、奥店蔵と3つの使われ方をしている。2階は8間×2.5間、それぞれ1階より箱階段で登ることが可能であり、中仕切り襖開戸(幅5尺)で行き来できる。小屋は和小屋組みの1.5尺の化粧曲がり梁を使用して土で塗り込められた屋根の重量を支えるに可能としている。垂木は3寸×2.2寸@1.2尺で5.6寸勾配の流れ9尺を持たせているが、垂木に反りがきいている。基礎は石積み4~5段として、水害から護られるように床を揚げている。駿信往還入り口土間には8寸×6寸の樫の大黒柱に尺の框を差して土間から430ミリ上げた畳み床である。壁は仕上に白漆喰を腰壁には平瓦張りのナマコ壁である。窓開口部は左官鍔の手さばき技術が施され、盗難避け鉄格子の跡がある。また蔵扉は主家側にある、かつては店蔵として使用している時期は、主屋とは離れた外部であったため非常に堅牢に出来ている。主屋とつながれて、内部空間化されて後、その蔵扉としての機能が少しずつ薄れて、今では半分壁に塗り込められている、その造りは意匠的価値を見出せるものである。また、床下には煙草の収納室があると言われ、玉石が敷かれていることは、蔵造りの床下納まりの基本である土の下から侵入する鼠除けの工法が見られるのではないと思われる。

[文庫蔵]は3.5間×2.0間二階建てである。置き屋根付きの土蔵造りである。基礎の高さからして、店蔵の用途とは完全に異なる使用目的で造られたのである。小屋組は登り梁形式で、地棟木に1.0尺角ものを通し妻側を登り梁として、二階の内部空間を有効に使用するための知恵と工夫が施されている。その上に土が塗り込められた層を造り、最上に置屋根の軒の出を4.0尺出し風雨、火災から漆喰壁の土蔵を護る置き屋根構造としている。これはたぶん正次郎翁のお気に入りのものであったと推測される。極力開口部を少なくし、コンパクトな大きさとし、階段を無くして、二階を気密性良くしている。また、入り口蔵扉は軽快な左官技の装飾と、大戸引き戸、障子が組み込まれ、堅牢、美しさ、居住性を満した蔵である。学問を山岡鉄舟、谷干城など維新の主人公等に教えを請うた書を尊んだ翁の好みであろう。主家からは仲居8帖(現在仏間)から渡りの間を通り北に位置する。正次郎翁が晩年寝室として使用したと言われ、この屋敷配置になってからは山梨の村松家として実質の蔵の役割を果たしていたのはこの文庫蔵であろう。時代の流れに添うように屋敷の中央に建物が集まってくる商売の形態の変化が読み取れる。つまり、この住宅には農機具入れのような納屋は存在しなく、農+酒造⇒農商酒+医⇒両替商⇒銀行⇒投資会社⇒政財界⇒へと歩む過程が建築の変遷として記憶されている。

[廁]は、木造平家建て瓦葺き6.0尺×10.0尺の腰壁下見板張り矢羽根押し縁押さえの完成度の高い建築として今回併記しておく。

[中潜り門]は、中庭を座敷前に造り、屋敷の中での高貴な庭造りを意図した時代背景の遺産として残る。

以上、村松家住宅の現存している建築群はこの地域の商家蔵を併設した街道沿い農商人文化の典型である。明治維新時、直轄地の甲州で自由な時代の開ける予感を信じて生き、率先して羽ばたいていった村松家の先祖の歴史はこの地域の近代史(産業とライフスタイルの変遷)そのものでもある。折しも、いま個人の意識が開かれつつある現代において、この近代化遺産の投げかけるものははかり知れないものがある。これをこの地域の都市景観の変遷として置き換えるならば以下のことが言える。

駿信往還(国道52号線)の歴史的町並みの形態は土蔵造りの老舗の景観であった。代表的な小笠原の宿でもいまその素晴らしさを観るのは至難である。日本全国、商店街活性化のため道路拡副をしたがそれは資本の淘汰に拍車をかけた結果になった、また車は通過に拍車を掛け失うものが多かったとの反省はこれら商店街でもよく聞かれる。その反面、それぞれの商店の特性を活かした経営と、歴史的な町並みを活かした街づくりが一体となる地域経営が見直されつつある。また、この地域は道造りと共に発展を遂げてきた近代の歴史を持つ、その事業が個人の生き方を大きく換えて、蔵と一体化した暮らしが町並みを形成してきたという事実がある。

5 建物経緯調査

主屋・商家蔵の建立の歴史的背景を考察してみよう。村松家史年表(別添)・櫛形町史より漢方医村松健齋が養子として入り、村松家が大きく変化していったことが判る。また、漢方医勝格弥(勝一本家後継者で健齋の実弟で桃園学校の初代校長明治6年12月17日)との関係で商家は桃園の近代に深く関わっていたことも判る。主屋が二階に持ち上げられて、二階は垂木構造に近い京呂小屋組(天秤梁・擬トラス構造)であり、二階のスペースの使われ方や連続したアーチ窓の並び配列など、村松家とこの地域の近代の関係がこれらの建築仕様から解明されていくことを期待して進めたい。

商家蔵棟札一写真

商家蔵棟札一明治6年5月5日(1873年)村松健齋(48歳)建立

棟梁夜子澤(現中富町)村、幡野宗兵衛、藤原宗親。商家蔵棟札に見られるように、ちょうど130年が経過した。村松家史からは桃園村百姓代村松助右衛門から漢方医の健齋が婿養子に入るときである。そのとき子正次郎(文久二年1862年1月生まれ)は12歳になっている。それより遡り9年、139年前主屋が新改築された。



主屋棟札一慶応元年(1865)10月吉日
村松健齋(漢方医39歳)建立。
棟梁一下田原村若林駕蔵源治知、他



また、大正10年消防団の写る(写真一)や(写真二)中潜り門下見板張り写真は修復された記録として貴重な資料(漆喰壁の修復手法として)である。

写真一



主屋・中潜り門前写真 大正十年三月二十三日写す 桃園、沢登爾
新田消防出陣式後撮影



写真二

中潜り門下見板張り大正十年より以前か以後



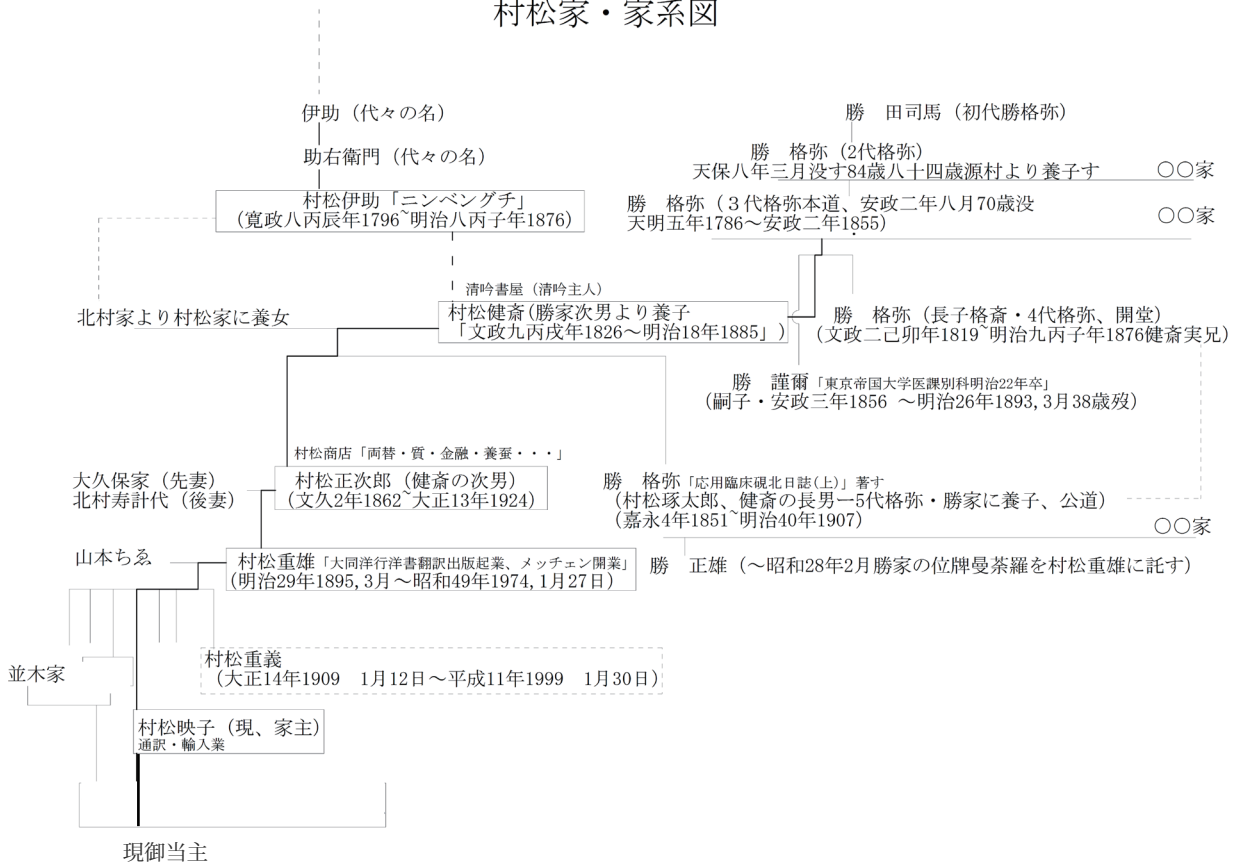
旧峡西電鉄 桃園駅プラットホームから描いた村松家西面
1946. 10. Takizawa「廃屋」

1-2 幕末期から明治維新、初期における村松家先祖と地域社会との関わり
の歴史-1。(参照一柳町誌史料編より) 01/12/00 久保田要

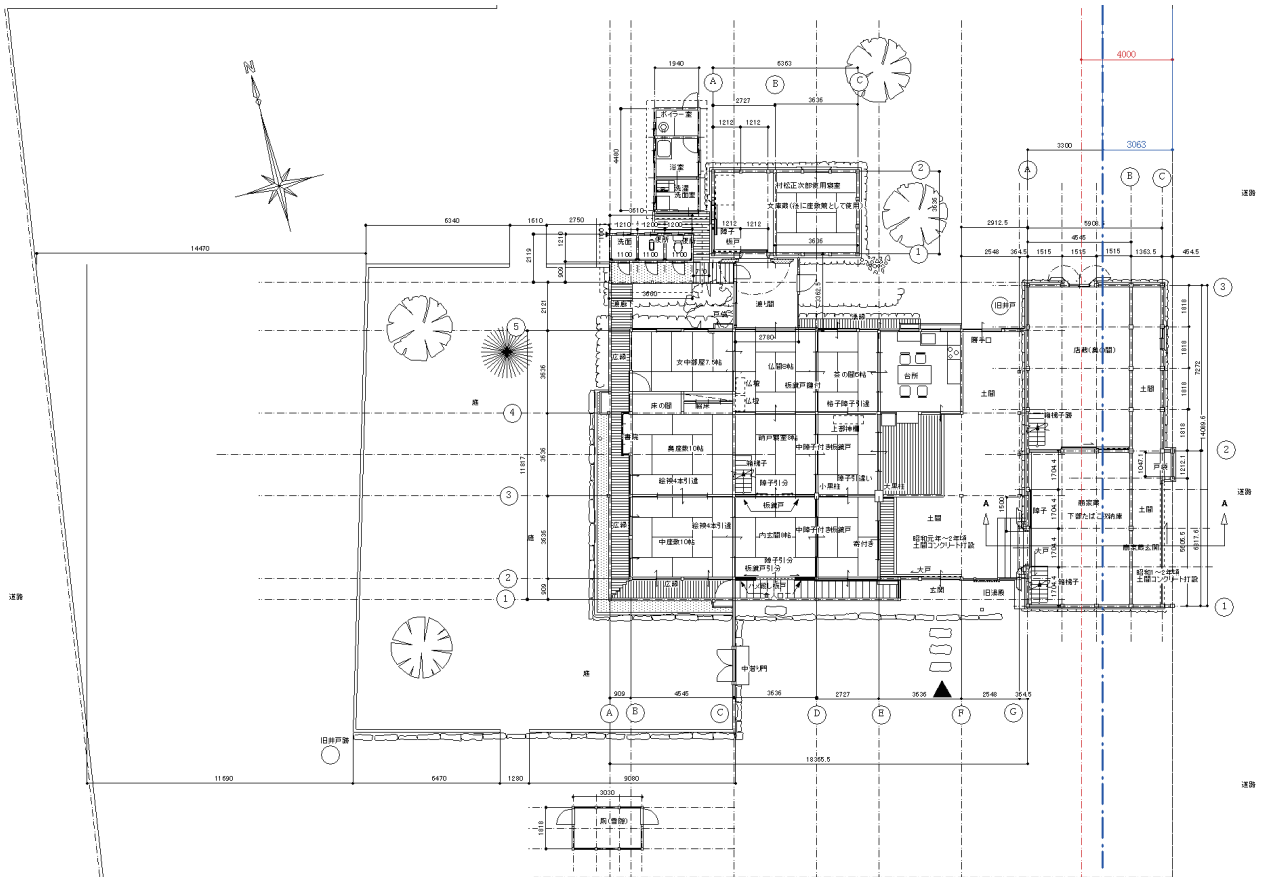
年代(元号)	西暦	村松家人物	見出し	内 容
文政 九年戊 二月	1827/2	組頭 伊助 (30才)	原方村々肥相継注文定二付	名主宛、当年油かす高値につき年貢手当て?
天保 九年戊 九月	1839/9	長百姓 伊助 (42才)	天保騒動余開業山孫三郎へ出金 始末書	御奉行所深谷遠江守宛、金二百五十兩御民御救金+水野越前様五兩取替金可 致
十一年卯 二月	1841/2	酒造人 伊助 (44才)	酒造減申上書	野村彦右衛門御役所宛、酒造米84石→3/2の56石、造桶五尺九本、但し一 本京樽六石造、外手伝小桶式拾本。
十四年卯 五月	1844/5	名主 伊助 (47才)	桃園村上納金額	金二兩外二名同額、長百姓与左衛門、惣左衛門。
弘化 三年午 六月	1847/6	長百姓 伊助 (42才)	桃園村名主交替故障の出入	市川御役所宛、当村名主役乃儀、是迄長百姓之内ニ而順年番二勤来り罷在候。
々 十二月	1847/12	々 伊助 (々)	桃園村夫銭割坊害二付訴へ	甲府御役所宛、巨摩郡桃園村役人一同奉申上候。
々 十二月	1847/12	々 伊助 (々)	桃園村夫銭割出入	甲府御役所宛、巨摩郡桃園村役人一同奉申上候。
四年未正月 八日	1848/1/8	々 伊助 (51才)	桃園村夫銭割出入	甲府御役所宛、巨摩郡桃園村役人一同奉申上候。
正月 九日	1848/1/9	々 伊助 (々)	桃園村夫銭割出入	甲府御役所宛、巨摩郡桃園村役人一同奉申上候。
正月十三日	1848/1/13	々 伊助 (々)	桃園村夫銭割出入	市川御役所宛、巨摩郡桃園村役人一同奉申上候。
嘉永元年申十二月	1848/12	長百姓 伊助 (51才)	桃園村夫銭割出入済口定書	対談申議定書之事。名主役交代之儀、百姓代之儀、惣百姓相談之上入札...、夫銭、 年貢等
十二月	1848/12	桃園村医 格弥 (才)	桃園村騒済口証文。	市川御役所宛、差上申済口証文之事
三年戊七月廿九日	1850/7/29	長百姓 伊助 (53才)	桃園村御祭神酒一件済口証文	市川御役所宛、御祭り御神酒贈之儀
四年亥四月十二日	1851/4/12	々 伊助 (54才)	桃園村騒ノ事済口証文。	市川御役所宛、差上申済口証文之事
九月 二日	1851/9/2	桃園村医 格弥 (才)	桃園村名主交替継れ済口証文	市川御役所宛、差上申済口証文之事、桃園村名主-仙蔵
安政四年巳八月	1858/4	長百姓 伊助 (61才)	八幡宮社木伐採二付訴へ	乍恐以書付御訴訟申上候 訴訟人御朱印地八幡宮神主内藤左馬介、乱妨狼 藉出入 伊助控一才吉
七年申正月	1861/1	長百姓 伊助 (65才)	村役人百姓代選任	当村百姓代之儀、人少二相成候二付、今般村中相談之上四人入札二而取極可申。
文久元酉年八月三日	1861/8/3	名主 伊助 (65才)	貯穀請書	市川御役所宛、差上申一札之事、初式石七斗老合、麦式拾四石老斗六升五合、 粟老石三斗八升。御改請申候。
十月	1861/10	名主 伊助 (66才)	和宮下向助郷願末	和宮様、御下向之節、宿衛人馬多入候間、左之村々中山道下諏訪宿助郷申付 候条、
慶応三卯年三月	1868/3	長百姓 伊助 (72才)	百姓代選任議定	当村百姓代之儀、人少二相成候二付、今般村中相談之上九人入札二而取究可申。
明治三年年二月	1871/2	長百姓 伊助 (75才)	桃園村役人新役入振舞之事。	別番議定書之事。当村之儀旧来相治り候処、村役人追々人少二相成御用村用 差支、
三月	1871/3	長百姓 伊助、百姓代助右 衛門	村役人新役六人加入二付議定	当村之儀旧来相治り候処、村役人追々人少二相成御用村用差支、 依之今般村中熟談を以新役六人加入いたし候趣、入札...
五年申八月十六日	1873/8/16	百姓代 村松助右衛門	大小切喚願	山梨県御役所。大小切御居置喚願 八ヶ村...
六年七月十一日	1874/7/11	百姓代 村松助右衛門	桃園村伍長惣代仕立方議定	今般村方...
八年一月廿五日	1876/1/25	副戸長 村松健齋 (50才)	小笠原、山寺、桃園合村対談書	合村規則相立候までへ、
十一年六月 六日	1879/6/6	村総代人村松健齋 (53才)	明徳村事務所移転二付願	山梨県令 藤村紫朗宛、当村事務所位置之儀、合併事務受渡之際、別紙の通 対談いたし置、...
十一年八月	1879/8	村総代 村松健齋 (53才)	桃園村より明徳事務所移転促進 方願	山梨県令 藤村紫朗宛、右奉申上候、去ル明治八年一月申御意奉載、旧山寺、 旧小笠原、旧桃園右三村
十二年十月	1880/10	村総代 勝 格也	早川開鑿総代人願書	山梨県令藤村紫朗代理 山梨県大書記百西村亮吉宛、別紙早川開鑿惣代拾五 名之内、...

記

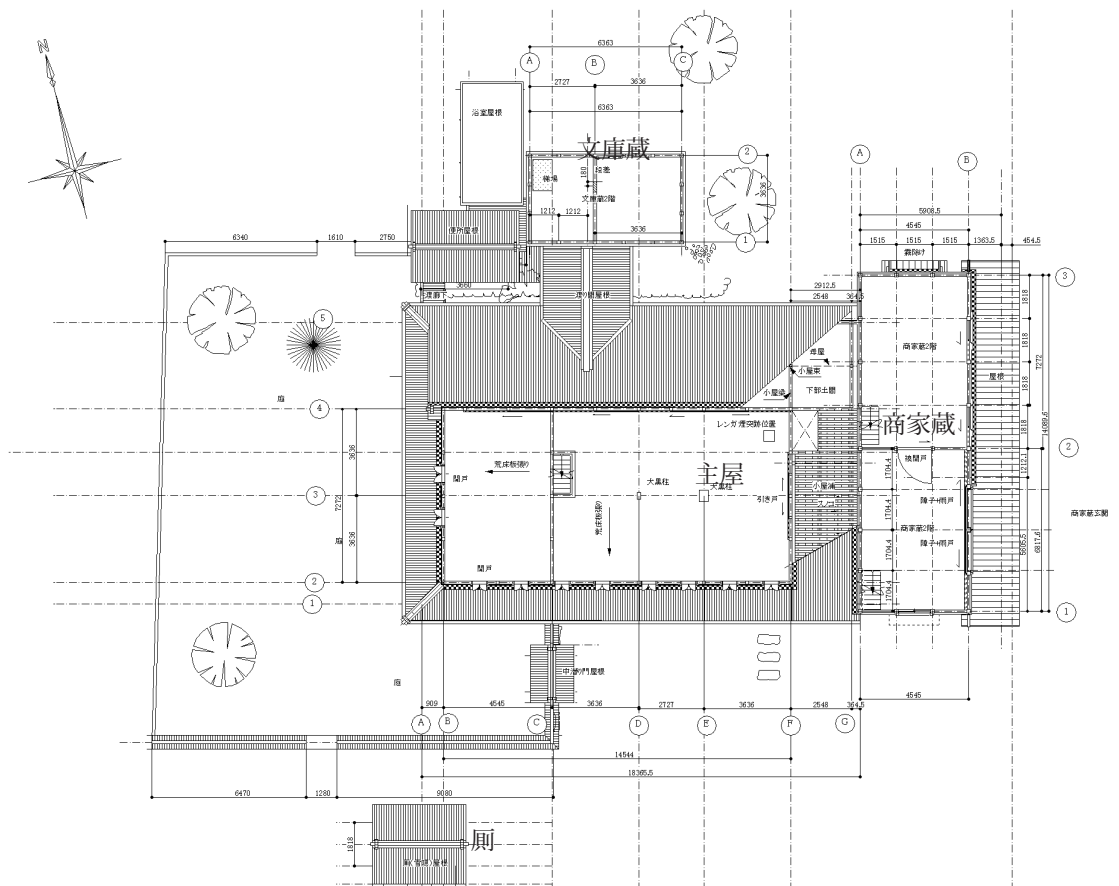
村松家・家系図



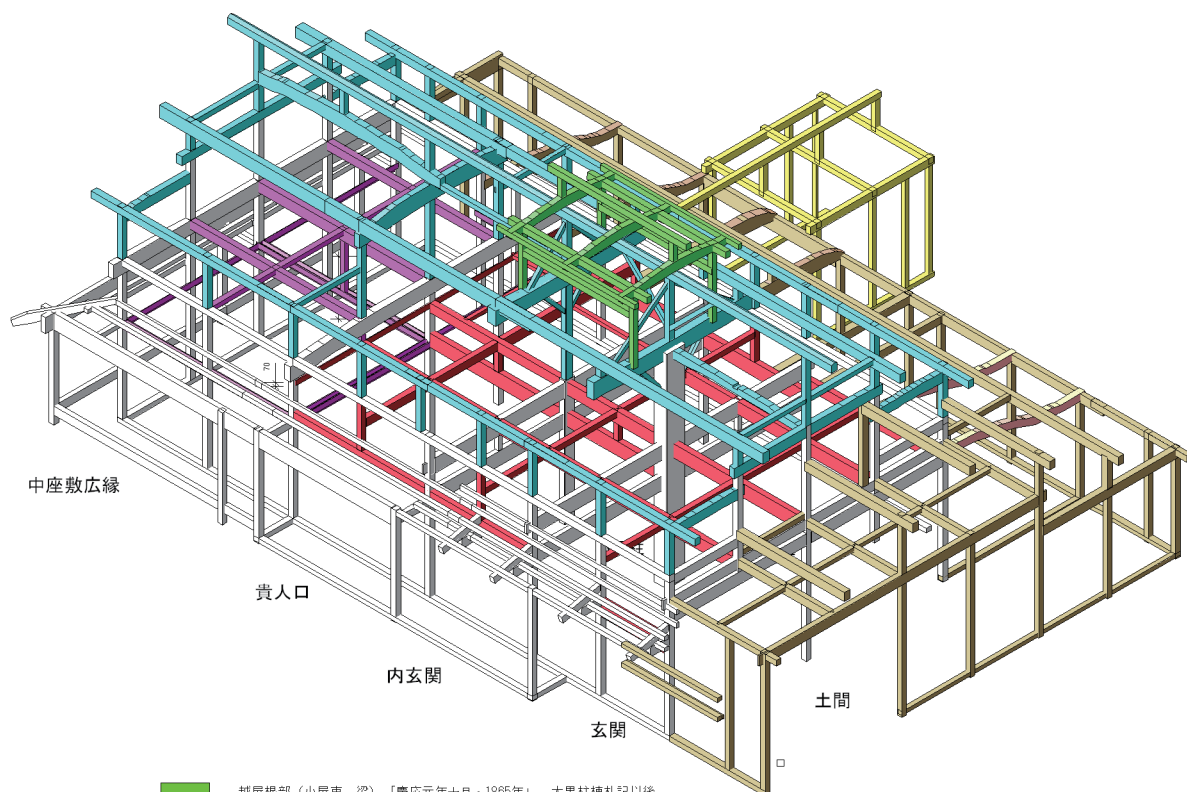
1-3 調査一改修前村松家住宅主屋・商家蔵



平成 15 年以前の村松家 1 階平面図



平成 15 年以前の村松家 2 階平面図



- 越屋根部（小屋束、梁）「慶応元年十月・1865年」、大黒柱棟札記以後
- 2階増築部（柱、梁）「慶応元年十月・1865年」、大黒柱棟札記以後
- 1階貫構造・胴差し梁部（梁）「慶応元年十月・1865年」以前、大黒柱棟札記
- 1階座敷（書院造り・長押構造・梁）清吟書屋「明治五年・1872年」村松健齋書、以前
- 1階文庫蔵へ繋ぎの間（柱、梁）「明治六年五月五日・1873年」商家蔵建築以後
- 1階増築部（貫構造）（柱、梁）商家蔵・文庫蔵につなぐ土間、台所、女中部屋等「明治六年五月五日・1873年」商家蔵建築以後
- 1階部（貫構造一柱、梁）「慶応元年十月・1865年」以前、大黒柱棟札記

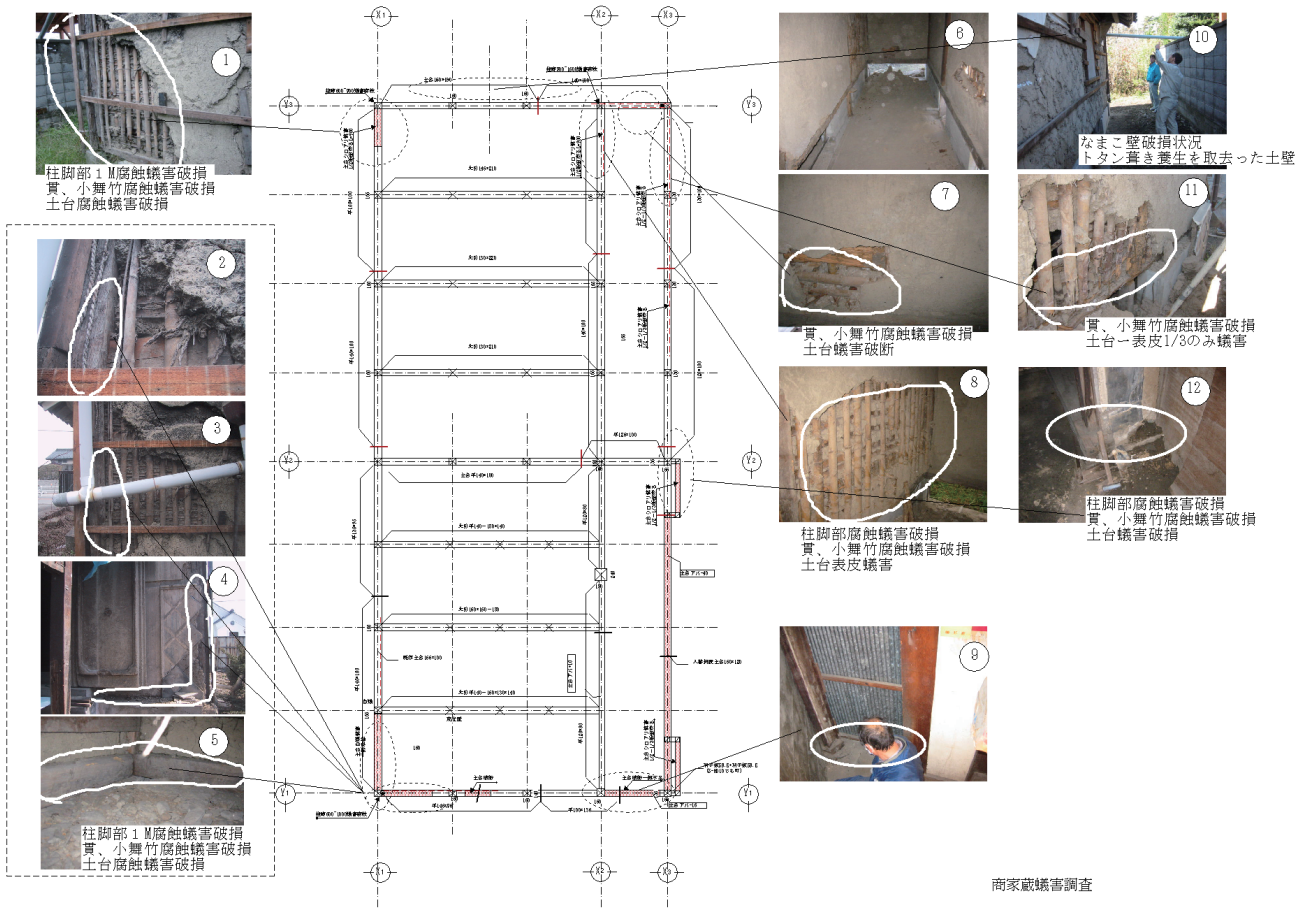
CG・村松家増築、移転前軸組部 南東部鳥瞰図



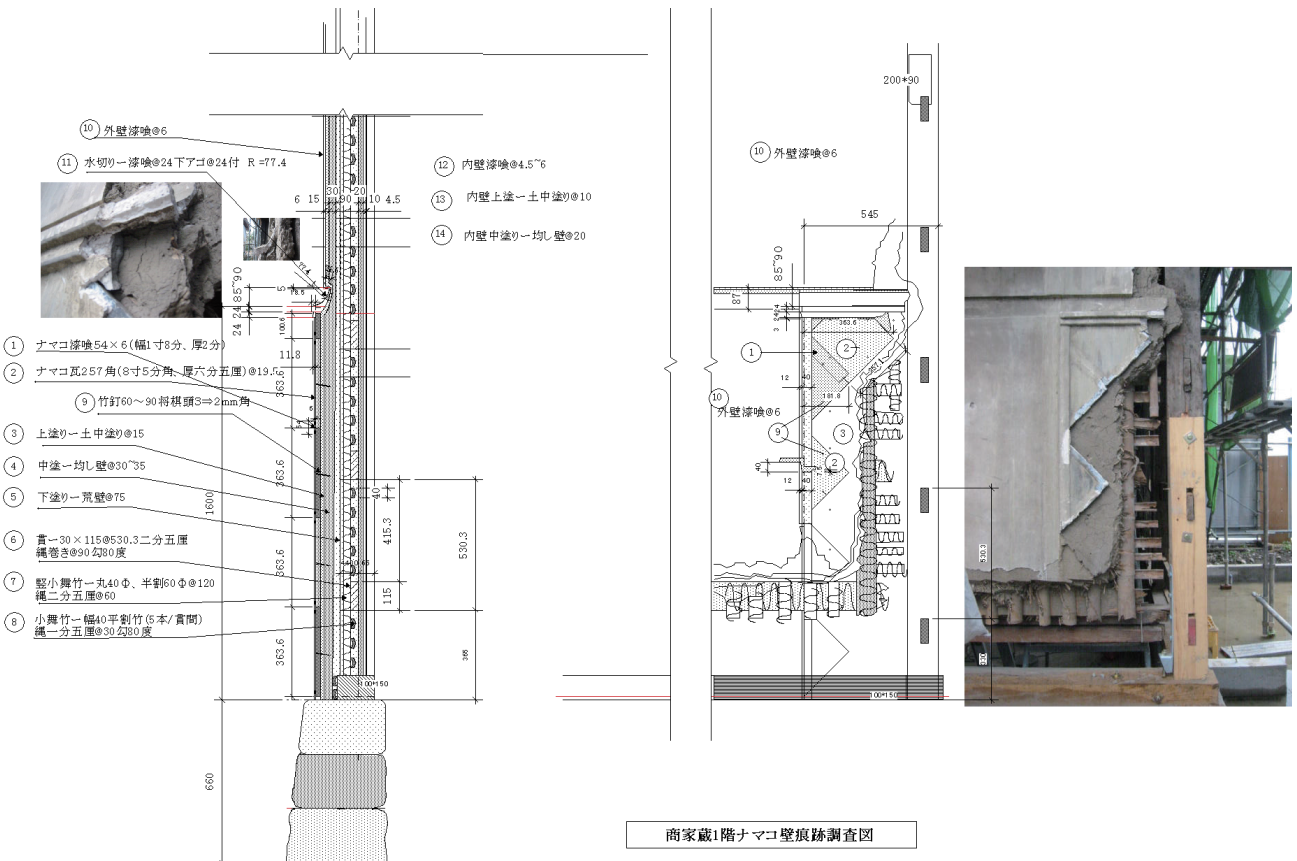
商家蔵南東部立体軸組図



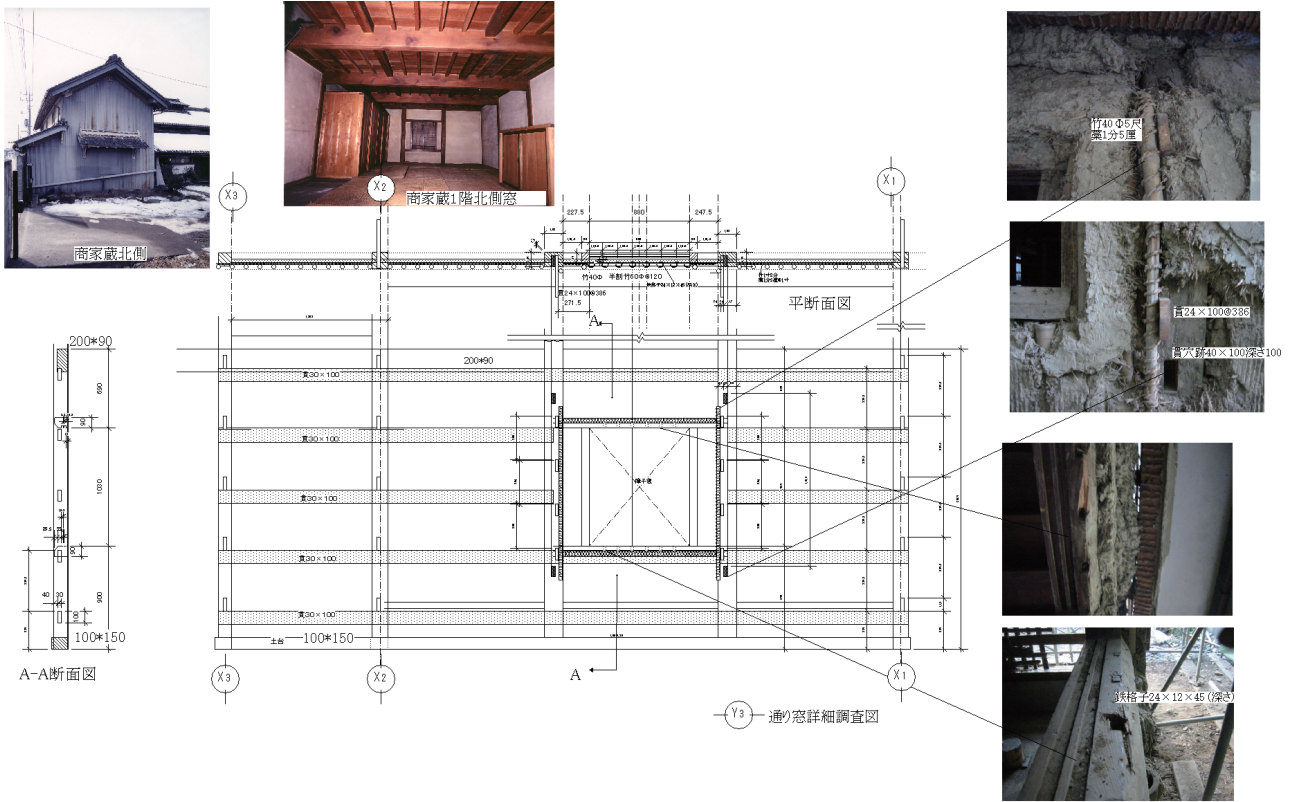
商家蔵西部立体軸組図



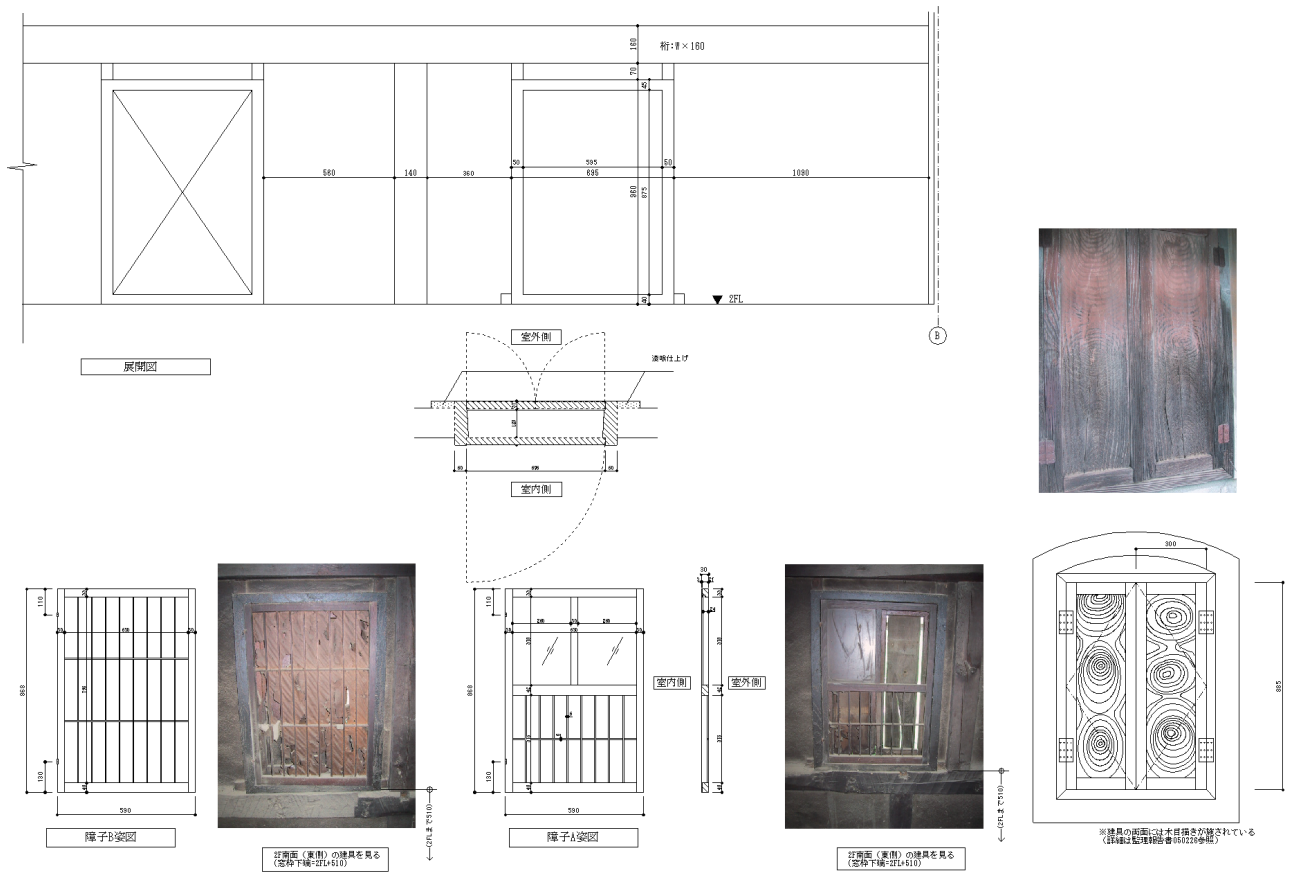
商家蔵蟻害調査



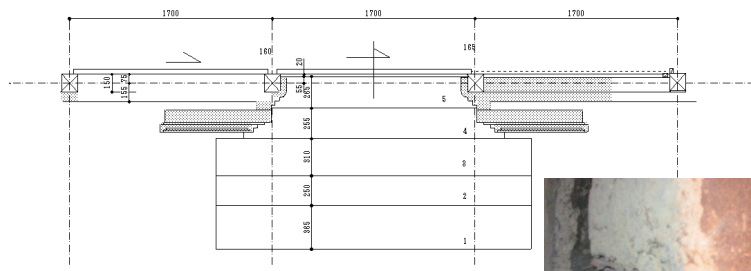
商家蔵壁、海鼠壁納まり調査 (柱は曳き屋の時金輪継補強済)



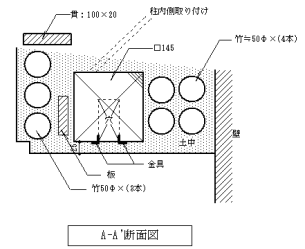
商家蔵、1階北窓痕跡調査



主屋2階南側開口部詳細 (内障子、ビードロ障子、+木目描きのある雨戸観音開戸)



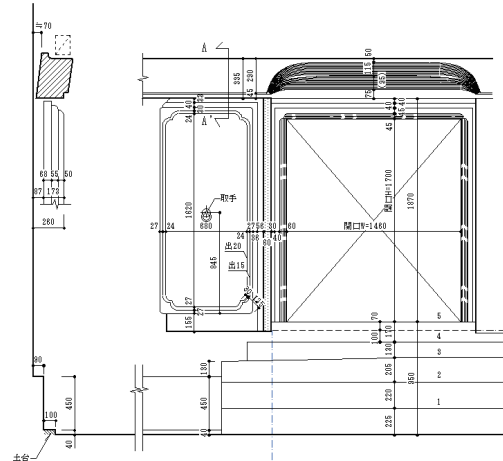
大扉平面図



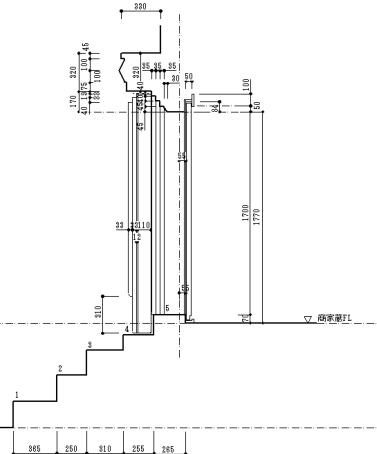
A-A'断面図



土蔵扉軸受右左ヒンジ金物リング釘留



大扉立面図

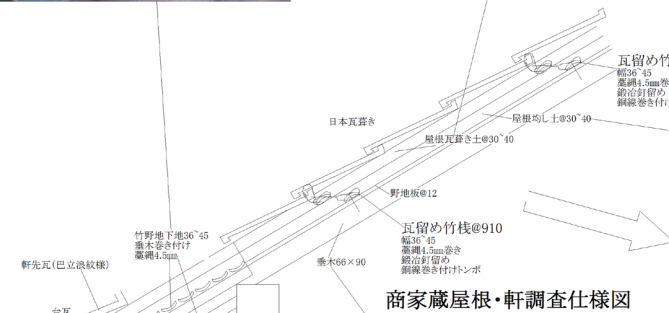


大扉断面図

商家蔵土蔵扉実測調査（軸受仕様—安山岩の台座部と上部冠木回転部補強金物）



商家蔵屋根・軒調査改修仕様図



商家蔵屋根・軒調査仕様図

商家蔵屋根・軒改修仕様

※瓦納まり仕様
1階下屋部は最古原型の唐草軒瓦(連珠付三つ巴立浪模様)を出来るだけ使用し、次期の唐草軒瓦(三つ巴唐草紋様)は使いたくない。
袖瓦と平瓦のサイズの違いは丸瓦で馴染ませます。
大屋根は三州に小瓦割のものを紹介(中内課長)し、いぶして行く方向を見積もる。か見積通り銀黒陶製瓦か、イブシ瓦53枚/坪とする(引つけ竹瓦仕様)予算の範囲で決定する。

※軒天、竹野地下地の仕様
竹野地下地の痛みの激しい箇所は「角又糊で固める」か「ハイフレックスの稀釈材撒布(霧吹きポンプ)で3回施し、1回目の薬と土中均し土の馴染みとしての撒布後、麻かシュロなどの網状の補強材を敷き、2回目の撒布して、これを馴染ませます。その後砂漆喰で上部を10*15塗りこむ。
下部軒天は、土中均しをそれに先立ち塗りこみ当初の納まりを継承するものとする。



商家蔵屋根・軒 - 竹野地下地仕様・調査

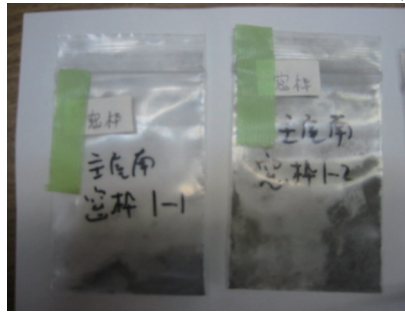


主屋大屋根軒先実測調査図

色彩調査 八窓枠(塗料の蛍光X線分析) 辻政雄, 木村英生山梨県工業技術センター研究員(20050302)



主屋2階窓枠塗料サンプル(1-1)



主屋2階南窓枠塗料サンプル(1-1、1-2)

村松家主屋2階開窓塗料蛍光X線分析結果一サンプル(1-1,1-2)

2-1		105-03-02 15:43 [000]	
元素	濃度(%)	強度(cps)	誤差(cps)
Zn	48.8853	602.24	2.6537
Ca	19.4988	28.72	0.5796
Ba	20.4098	31.62	0.6080
Sr	0.9317	25.65	0.5476
Fe	6.5125	52.30	0.7820
Cu	0.4465	10.12	0.3440
As	3.3153	39.17	0.6767

2-2		105-03-02 15:56 [000]	
元素	濃度(%)	強度(cps)	誤差(cps)
Zn	49.4530	717.89	2.9401
Ca	7.7945	14.55	0.4185
Ba	28.2840	46.44	0.7478
Sr	0.9856	32.17	0.6224
Fe	5.9492	51.81	0.7899
Cu	0.3955	10.7	0.3605
Pb	7.1382	37.55	0.6724

主屋南八窓の木枠部のペンキは薄青、グレー色を呈しているが、グレーそのものに近い。今回の分析によると、Zn-54.47%(亜鉛=白、緑)、Ca-26.85%(白亜=石灰石)、Ba-15.72%(重晶石=白) Sr-0.90%(還元剤)Pb-1.09%(鉛白)Fe-0.49%(黄土=青)Cu-0.45%(銅=岩群青)という結果から、ここでは白色系が主に抽出された。緑色系顔料として、亜鉛緑 ZnCrO₄ や群青 KFe {Fe(CN)₆} 部分は青、緑化する。今回 Cr,K,CN 等は検出されない。少量なのか生成過程で過、後に風化したのか?主成分の残量から薄青緑色の彩があったことは明らかである。